

聞かされて来る

言はせられる

松下 昌義

目次

一、聞こえて来る声に生きる	一
一、わが母とは誰ぞ	五
一、神に聞いてくれ	九
一、信じて受けるありがたさ	一三
一、人には出来ないが、 神には出来る	一七
一、生きる根拠	二一
一、有りのままに見る	二五
一、地には平和、人にあれ	二九
一、順序がある	三三
一、感わされてはならない	三七
一、あとがき	四一

# べしるちるみ

キリストがわたしの内に生きておられる。——聖書——

## 聞えて来る声に生きる

松下昌義

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。  
どんなことにも感謝しなさい。

—新約聖書 第一テサロニケ五章十六節—

これは、とてもよい言葉である。一生自分の思いの内に持っている言葉としてとてもよい言葉だと思ふ。でも、その言葉のとおりに関心して自分が生活できるかという、正直言つて出来ない。にもかかわらずこの言葉どおりの生活が出来たならよいのと思う。諦めながら、なお願う、という何ともいえない心境で、この言葉を何度も読み返し、言葉していると、いつのまにか心のなかに定着して離れなくなっているのに気づく。

この言葉を何度も口にしていて、それは自分にとって遠い言葉であると同時に近い言葉であるように聞こえて来る。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい、と聞くと、忽ち遠い言葉になる。そんなこと出来ない、と反発してしまう。

しかし、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい、と聞こえて来ると、近い言葉のように思ふ。そうだとすると、素直になる。「聞く」と「聞かされて来る」とでは思いの持ちようが全く違ふのである。

「ゆるしてやりなさい」と聞くと、なぜゆるさなくてはならないのだ、悪いのはあいつではないか、と反発したくなる。ゆるすことは出来ないと思ふ。ゆるすことは自分の負けだと思つてしまふ。しかし、「ゆるしてやりなさい」と聞かされて来ると、ゆるすことは出来ないけれども、ゆるしてあげようかな、と思つて来る。

聞くは行、聞かされるは信。と教えて下さった方がある。なるほどと思ふ。

聞かう、聞かうと思つても疲れる。ましてや、聞かねばならぬ、聞かねばならぬとおもうと一層に疲れる。嫌になり投げ出し、逃げ出したくなる。でも、逃げてはならない、逃げてはなにも自分のものにする事が出来ない、と思ひなほして努力する。だがやはり逃げ出したいと思ふ。その内に、さまざま疑問がわいてくる。こんなことをして何になるのだ。本当にこれでよいのか。自分は馬鹿なことをしているのではないか。しかし、忽ち、そのよ

うな弱音を吐いていてどうする、という反発がおこり、聞くのだ、従うのだ、聞かねばならない、従わねばならぬと自分にせまる。結局、自分自身を叱咤激励しつたげきいをすることになる。まさに行ぎやうとはこのようなものである。

このような、聞くは行ぎやうの在り方は、どんなことにも感謝しなさい、という場合においても同じである。感謝することはよいことだ、だから感謝すべきである。と聞くと、何か反発したくなる。あまりにも理屈ばかりで頭の一部分だけが納得し他の大方の部分は、冷めて傍観し、冷笑し、無関心であるのが、自分自身にはよくわかる。にもかかわらず、自分のどこかで、やはり感謝しなくてはならないという感情がすてきれずに残り、一種の脅迫観念きょうぱくくわんねんとして自分を突き上げて来る。

では、聞こえるは信という、聞こえるとはどういうことなのだろうか。それは、聞くということが自分の力、努力で聞こえるとするのに対して、向う側から自分に聞こえて来る、ということである。自分が聞こうとして努力して聞くのではなく聞こえて来て、それを聞かせていただき、自然に聞こうという思いにさせてくれるのである。感謝しなくてはならないから、感謝するのではなく、感謝せずにはおれないから、感謝するのである。

この姿が聞こえるは信ということである。

わたしは世間では牧師ということになっている。若いころは、牧師だからという気負いがあった。何時も追いかけられている思いをもっていたが、あるとき、わたしは牧師という務めを神さまにさせていただいているのだ、と気づいたときからその務め

にたいする気負いがなくなつて、神さま有り難うございます。2  
よろしくお願ひいたします。という喜びと平安の思いが心の内にあたえられるようになった。これが聞こえるは信ということの有り難さである。

×

人の生き方には聞く生き方と、聞こえる生き方とがある。聞く生き方は、自分の力で生きているのだ、生きていかなければならないのだと思つている人である。聞こえる生き方とは、自分よりもっと偉大な命に生かされて生きているのが自分なのだ。と気付いている人である。

×

私は聖書によつて自分が神さまに生かされている者であることを知らされた。それ以前は自分で生きているのが私だと思ひ込んでいた。その後、さらに聖書を読んで教えられたことは、神に生かされているということがわかるのも、自分の力でわかるのではなく、神さまの力でわかつていただくのであるということである。これは驚きであつた。

自分の力で生きているのだと思つているあいだは、どうしても、自分が、自分がという思いばかりが強くなつて、いつも自分が出発点になるので、自分以上のものに気がつかない。努力するのも自分、反省するのも自分、後悔するのも自分、親切にするのも自分、喜ぶのも自分、悲しむのも自分、楽しむのも自分、不安になるのも自分、仕返しをするのも自分、老いるのも自分、病気で倒れるのも自分、健康にするのも自分、子供を育てるのも自分、仕事や事業を進めるのも自分、とにかくにも



かも自分で背負い、自分の力と知恵と努力とが頼りとなる。そのような生き方をしていると、自分以上の力や、その恵みということについて、ますます無感覚な自分になってしまふのである。この無感覚になる、ということがもっとも恐ろしいことである。

聞く生き方とは自分に取り込む生き方でもある。また、聞かえて来る生き方とは、捨てていく生き方でもある。

若い頃、わたしは信仰生活に於いても、ひたすら自分に取り込む生き方をしていた。少しでも聖書の知識を身につけることが信仰を増すことだと思っていた。多くの信仰の先輩の記した宗教書を読むことが自分自身を神のまゑに高めることだと思っていた。とにかく何でも自分に取り込めば、必ず自分がそれだけ成長するものだと思っていたのである。しかしそれは誤りだということがイエスさまの言動を見つめて行くうちに分かって来た。イエスさまは自分に取り込む為に求めるのではなく、自分にあるものを捨てる為に求めなさいと示されているのだということがわかってきた。

自分に得るために求めるのではなく、自分を捨てるために求めるとき、偉大な命が現れて来るとキリストさまは示されるのである。

自分を捨てるということは、自分が持っている悲しみや苦しみ、怒りや怨み、奢りや高ぶり、さらに、さまざま欲望と利

己心などを捨てるということであるが、キリストさまが示される捨てるとは、無くしてしまうことではない。正直言って、私達は自分が持っているそれらを簡単に捨て切ることは出来ない。だから悩むのである。捨てる事が出来れば、どれほど楽になるかと思う。どうしても捨てる事が出来ないのが自分なのである。

キリストさまが示される捨てるとは、投げ込め、委ねよということなのだ。どこに投げ込み委ねるのかというと、私に投げ込み、委ねよといわれる。「わたしに」とは、永遠なる命の滾りにご自分である。キリストさま自身この永遠なる命の滾りにご自分を投げ込み、まったく委ね、その命と一つとなって自分の命を命された。かの十字架の苦しみの最後に「父よ、わが霊をあなたさまに委ねます」と祈り、父なる神、即ち永遠なる命の滾りにご自分を投げ込まれた。それだからこそ三日目にその永遠なる命の滾りそのものと成って復活されたのである。因みに復活とは新しい命をもって毅然と立ち上がるという意味である。

使徒パウロは言いました。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身をささげられたキリストに対する信仰によるのです。

彼はキリストの命のなかへ、即ち、永遠なる命の滾りの中へ、どうしようもない自分の身も心をも投げ込み、キリストの命と一つにしていただく信仰によって、大安心を得て自分を生きている。

このパウロの生きている姿には、「聞く」生き方、又「聞き従わなければならぬ」という生き方が消えてなくなっている。彼は、永遠なる命の滾りに抱き抱えられ、それと一つとなり、その命に促されて大安心の内に生きている。彼にはこの永遠なる命の聲が、即ち「聞こえて来る」キリストさまの声を全身にいただいで生きているのである。

×

さて、初めに紹介した聖書の言葉をもう一度言葉してみよう。

×

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。

なんと有り難いことばであろうか。喜びも祈りも、感謝も自分から努力してするものではなく、自分にさせてもらうものなのである。この世の悲しみや、苦しみ、怨みや怒り、さらに自分の欲の思いに自分を置いて生きている間は、喜びも祈りも感謝も出来ない。しかし、自分がどのような状態のなかに在っても、またどのような思いを自分の内に抱いていても、そのままの自分を安心して委ね、投げ込み、それを確りと受け止め、そのままで包み込み、抱き抱えてくださる永遠なる命の働きに思いを置くものには、不安であっても安心がただけ、苦しみがあっても安らぎがただけ、怨みや怒りがあっても赦す心が

ただけ、欲心はそのまま感謝に変えられるようにしていただけるのである。

×

永遠なるものの命、即ち神の命は宇宙創造の初めから、万物の根源にあり光り輝き滾り張っている。そして万物を保ち導き、必ず完成したもう。その命の力と愛と恵みとをキリストさまは生きられて、私達に具体的にそれが及んでいることを示してくだされた。これを、「神の恵みの支配」と言われた、即ちキリストさまが言う「天国」「神の国」とはこのことである。だから「神の国はあなたがたの内にある」と言われた。すでにすべてのものの内にあり、それがそれを支え、生かしているのである。わたしたちのすべての者がその命に初めから与かっているのである。神が私達の内に住まわせてくださっている霊はそれをよく知っているのだ。そして、ひとりひとりの魂に訴えかけているのである。しかし、人の自我は聞こえて来るその声に耳をかたむけることなく、自我の欲心に振り回されて、すべてをその自我で処理しようとする。

×

しかし、内なる霊は永遠なる命の声をすでに聞いている。そして、それを喜び、祈り、感謝することを願っているのである。そこに生きる以外に私達の救いはない。



# みちしるべ

もはや、男もなく女もない。死もなく生もない。

— 聖書 —

わが母とは誰れぞ

松 下 昌 義

イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。大勢の人が、イエスの周りに座っていた。

「ご覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなただを捜しておられます」と知らされるのと、イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」。

— マルコ福音書三章三十一節 —

わたしたちにとって最も断ち難きもののひとつが肉親の情である。

だが、ここでイエスさまは、断ち難きその肉親の情を断ち切られておられる。いったい、イエスさまの内面で何が起きているのだろうか。それを尋ねることによって、ひょっとすると、私たちは全く

新しい世界に自分自身の眼を開かしめられるのではないかと思う。

あるとき、イエスさまに次のように申し出た人がいた。あなたさまに従いたいとおもっています。父を葬ってからにいたしますと。その人に対してイエスさまは言われた。「死人は死人に葬らせなさい。あなたは今、わたしに従いなさい」とこの言葉を聞いた人がその後どのようにしたかは聖書には記されていないが、想像に難くない。

わたしたちは「なんと厳しい言葉だろう」とかと思う。しかし、イエスさまの思いの世界に眼が開かれると、これは決して厳しいことではなく、至極自然なことがらなのだということが分かって来る。

なぜ、わたしたちは「厳しい言葉だ」と思うのだろうか。その理由は、「あれか、これか」というように二者択一的なものごとを受け取るからである。これを捨てるか、あれを取るか、さあ、どちらを選ぶか決断しなさい、と迫られているようにも受け取る。つまり、イエスがわたしの方を選ぶか、父を選ぶか決断せよ。と言われているように取る。だから、とても苦しくなる。なぜならば

あれも、これも捨て難いからである。あちらを立てればこちら  
は立たず、こちらを立てればあちらは立たず、ということ  
で悩むのである。言うならば、あちらもこちらも、というこ  
とになり、その間に入っとうろろすることになる。

しかし、イエスさまは「あれかこれか」など言っではおら  
れないのだ。このところを私たちは思い違いをしてはなら  
ない。この思い違いが奇妙な熱狂主義を生み出す温床となる  
ように思う。

では、イエスさまはどのような処に立っておられるのだろ  
うか。それは、「あれ」と「これ」とが重なって、「あれ」  
も「これ」も突き抜けた処に立ち「あれ」と「これ」とを眺  
める其処に立っっておられるのである。

これから、そのイエスさまが立っっておられる世界を皆さん  
とご一緒に探ってみたいと思う。

×  
わざわざ尋ねて来た母と兄弟について、「わが母とはだれ  
か。わが兄弟とはだれか」と、冷たく肉親の情を断ち切った  
ように思われるイエス。たしかに、イエスは肉親の情を断ち  
切っている。しかし、決して断ち切ってはいないので、否、  
断ち切っているからこそ、かえってイエスは誰よりも肉親を  
愛する思いを深く抱くことが出来た。

例えば、十字架の上で苦しみ給うイエスの側に、最後まで  
命がけで留まったのは四人の女性だけであった。その場の出  
来事についてヨハネ福音書は次のように語っている。

イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、  
クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っ  
た。イエスは、母に、「婦人よ、あなたの子です」  
と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい  
あなたの母です。」その時から、この弟子はイエスの  
母を自分の家に引き取った。

—ヨハネ福音書十九章二五節—

イエスは十字架の極度の苦しみの中にありながら、母のそ  
の後のことを思い、弟子に母を委ねられたのである。

×  
イエスは母マリアをこよなく愛した。だれが自分を生み育  
てくれた母を愛さない者があるうか。イエスは長子であっ  
た。おそらくいつも長子としての責任を親に対し、家族に対  
して抱き続けておられたに違いない。にも関わらずイエスは  
母、兄弟姉妹への情を断ち切る。その意味で、「わが母とは  
だれか。わが兄弟とはだれか」というイエスの言葉はとても  
重く、かつ厳しい。

イエスは軽々に母や兄弟を退けたのではない。世間には自  
分の信ずる宗教や主義主張にとられ、のめり込み自分ひと  
りが正しく、他の者はすべて愚かで間違った生き方をしてい  
る者と思ひ込み、軽蔑と敵意すら覚えて自ら傲慢者となり独  
善者となる人達がいる。そのような人は真の意味で、どのよ  
うな主義や主張、また信仰も語る資格はない。なぜなら、彼

は無知蒙昧の単なる独善的な利己主義者にしかすぎないからである。決して、「わが母とはだれか。わが兄弟とはだれか」というイエスの言葉を軽薄に真似てはならないと思う。

イエスの肉親に対する情は直接的ではない。直接的とは母と子、親と子とがその情のまま直接結びついているということである。「わたしがしてやらなければ」という思いがそこにあり、その情が互いに相手を捕らえて放さない。

「わたしがしてやらなければ」という相手に対する情は、一見愛情に満ちているように思う。しかし、この思いこそ曲者なのである。この思いは自分を相手に縛りつけ、相手を自分に縛りつける。その結果、自分も相手も身動きが出来なくなり、互いの念の相剋が内面に生じ、裏切った、裏切らないという恨みで傷つけあうことになりかねない。

このように情の結びつきが直接的で深ければ深いほど恨み心も深くなる。このことは、さまざまな人間関係においてもいえることである。

一見美しく見えるその情の直接的な結びつきが、私達のさまざまな問題を生み出すのである。親と子の問題、夫婦の問題、師と弟子との問題、仲間同士の問題、友情の問題、企業の問題、学校の問題、社会の問題、民族や国家の問題、政治や経済の在り方の問題、宗教の問題、とにかくそこに働く情には世俗的、利己的な欲望が見えない処で働いている。だから

さまざまな相剋が生まれ、憎み、恨み、嫉妬し、反発し、敵意を生み、混乱し、争うことになる。

熱烈な愛情で結ばれていた男女が、忽ち憎悪の仲となり、昨日の同志は今日の敵となり、子供を愛する親が子供を食い尽くすママゴンとなり、従順な子供が凶暴な反逆者となる。

イエスの肉親に対する情は直接的ではない。イエスの目は先ず天に向けられる。目に見える一切の背後にあって一切を創造し保持し完成なされる天の神にイエスの目は、すべてに先立って向けられる。そのとき肉親の情は破られる。肉親の情が無くなるのではない。むしろ、どろどろしたその情が清められると言うべきだろう。相剋の念を抱きつつ、それでいてどうしても切ることが出来ないで繋がっていた肉親に対して、その縁の不思議さに有り難さを覚えるようになる。そのことが、どろどろしたその情が清められるということである。このことを一口で言えば、肉親を自分に備え与えてくださった神に感謝しつつ、その存在に関わることができるといふことである。そこから発せられた言葉こそが、先のイエスの言葉であった。

今一度それを声をだしてゆっくりと言葉してみよう。

「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。

「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

どろどろした肉親の情を越え、破り、さらに清めることが出来るのは、一切を創造し保持し完成してくださる神を仰ぐ信仰によってのみ与えられるのである。どのような政治の方法でもできない。いかなる学問を積み重ねてもそれは出来ない。ましてや経済的な力でも出来ない。ただ、神を仰ぐ信仰に於いてのみそれがなし遂げられる。

イエスは今、自分の周囲に座っている人々を見回して「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」と言われた。

言うまでもないことだが、これは人間の情が生み出す建前としての軽々しいヒューマニズムから出てきた言葉などではない。人間の情から直接出てきたヒューマニズムほど偽善に満ちたものはない。それは歴史の事実が証明している。それは救うては殺し、殺しては救うのである。また、憐れみ拾いあげては捨て、捨てては憐れみ拾い上げるのである。すべては人間の欲の御都合によるのである。

イエスは親も兄弟も姉妹もさらに周囲にいる人々も、否、この世をまるごと神の恵みの働きの中へ投げ込んでしまわれる。そこでは、「わたしの母、わたしの兄弟」はわたしの手元から離れる。わたしの母が消えて無くなるのではない。わたしの兄弟が消えて無くなるのではない。そうではなくて、

「わたし」というどろどろした情から離れ、元からあった神にお返ししたにすぎない。そして、神によって備えられ出会うされた者として再び母、兄弟として感謝して受けなおすのである。その時、神によるもの、という信仰の認識からすれば、わたしの母とか、わたしの兄弟とかいうことは消えているのである。すべては神により備えられ出会うされた母であり、兄弟であり、姉妹なのである。即ち、「見なさい。ここに私の母わたしの兄弟が居る」ということになるのである。

× ×  
先の言葉で、イエスは「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、母なのだ」と結ばれたが、本当にそのとおりだと思う。すべてを創造し保ち、完成して下さるのは人に非ず神である。私達の日常に働くこの神の根源的な力、恵みと愛と支配とに目を開かれ、信じて生きている者だけが、あのどろどろした、わたしの情を乗り越えて、神の恵みの元ですべてを受けることが出来るようになる。その時こそ、私達は本当に平安な人間関係に生きることになるだろう。

わたしたちは今、落ち着いて、自分の家族のひとりひとりに出会わされたことを、神に深く感謝したいと思う。「わたし」というもののさまざまな情念に先立って、神がわたしに働いておられる不思議な恵みに深く深く感謝したいと思う。キリストさまはその御生涯をかけ、いかなるときも私たちの元に働き続けている恵みの支配をお示しになった。そこに気づくとき、人は必ず新しくなり、世界は新しくなる。



# べしるちるみ

わたしは良い羊飼いである

——キリストの言葉——

神に聞いてくれ

松下昌義

その人の書いたものを読んでいると、その人の考え方が見えて来る。また、その人の語ることを聞いていると、その人の発想の仕方が少しずつ分かって来る。さらに、その人の生き方を見ていると、その人の内面がより深く理解できるようになる。とは言っても、決してその人のすべてが分かるわけではない。人の思いは深く、心の世界は広くて極めがたい。だれも、他者を分かったように決めつけてはならないと思う。

× ×  
決めつけない、と言うことは「ゆるす」ことだと思ふ。キリストさまは度々「人をゆるす」ことを教え、ご自分もそのようになされたが、新約聖書における「ゆるす」ということの意味のひとつは「解き放つこと」であり「自由にすること」であると言われる。それは「決めつけないこと」に通じるのではないかと思う。このことは漢字においても同じことが言える。例えば「赦」とはソノママニュアルスであり、「許」とはソレガヨイトユル

スことであり、さらに、「免」とはマヌガレシムルことであると字典にある。

× ×  
決めつけることほど愚かなことはない。また、決めつけられることほど悲しいことはない。しかし、私たちはいつも決めつける愚かを犯し、決めつけられる悲しみを味わっている。

× ×  
決めつけることの愚かと悲しみは、もともと決めつけることが出来ない事や者を、自分の考えや思い、また、ある一つの主義主張また教義を絶対の尺度として事の善悪、正否を決めつけようとするものである。このような現象一般を「宗教化現象」とか「統一化現象」と私は呼んで来たが、こうした現象は何時になっても、人間の生活のあらゆる分野からなくなることはなく、いつまでもその愚かと悲しみとは繰り返されている。

× ×  
私は今、「決めつけてはならない」といっているのではない。そうではなく、ことや者を自分の思いや考えで決めつけてしまつては、その者や事の本当の姿を見たり理解したりすることから、まったく遠のいてしまう。ということを言っているのである。読んでもそれが分からず、聞いてもそれを理解できず、見ても見えない、ということに9

なると言っているのである。

× ×  
キリストさまも、当時の人々から決めつけられ、最後には神さまを冒瀆する者として、十字架刑に処せられてしまわれた。

キリストさまほど神を愛し、神に従い、神を生きた方は他に無い、にも関わらず、人々はそのキリストさまを、神を冒瀆する罪人として十字架の極刑に処したのである。しかし、そのような人が神に赦されるように、とりなしの祈りを十字架の上からなされた。キリストさまの赦しはそれほど徹底的だった。なにごとでも、行き着く所まで徹底するとき、それは計り難い大きな力となるのである。赦しも徹底するとき、ただの赦して止まるのでなく相手をまるごと救い取ってしまいう力となる。しかし、中途半端な赦しは憎しみで終わる。

× ×  
キリストさまと人々とのものの見方や考え方、または発想のしかたは根本的に違っていた。キリストさまは、どのようなあいにも、神と人という関係においてすべてを見られたしかし人々は、人と人、とりわけ自分と他人との関係で世間を見ようとする。

世の中を男と女との関係で見る人もいる。自分とお金との関係で見る人、自分と名誉や権力で見る人などさまざまである。しかしそれらの人達も結局、人と人との関係に於いて世の中を見ており、それを越えることはないのである。さらに

10  
宗教やその信仰ということにおいても、神を持ち出しながら結局、自分と人との関係にその神を利用するに過ぎないという宗教や信仰がある。徹底して神と人という関係においてこの世をみようとする人はまことに少ない。

キリストさまを十字架につけたのは、エルサレムの神殿を中心に宗教的権力を持っていた宗教家たちである。彼らは、うやうやしい宗教的儀式をもって神を礼拝し、あるいは神の教えである律法を神の言葉そのものとして固く守り、厳しく人々にも自分自身にも課せ、それに従い得ない者を地の民、世俗の民として蔑み、自らを最も神に近き者として生きていた人達である。にもかかわらず、キリストさまをして神を冒瀆する者として、十字架刑に処してしまったのである。それはなぜなのだろうか。結局、彼らの宗教理解、信仰理解が神を口にしつつ、その神は自分の宗教の神、自分の教義の神、人の眼に見える偉大な神殿の神、文字に記された神、自分たちの先祖の生き方として受け継がれて来た神にしかすぎなかったのである。そして、それに従う人々も含めて、結局は神の教えであり、神の言葉である律法が教える通りに語り、受け、守ることによって人にも自分自身にも、そして神にも安心していられるいわば自己満足的なそれであったといえる。だから、真実、神と人との関係に立って自分の生き方を見、人や物事を見るキリストさまの言動は理解出来ず、却って神を冒瀆していると思ひ込んでしまったのである。

×

×



キリストさまは自分の道、また、人の道を生きたのでなく、神の道を生きたのである。これが神と人との關係に於いてすべてを見るということである。それは、言うならば、人の道などわたしは知らない、ということである。事実キリストさまは言われた。

よくよくあなたがたに言っておく。子（私）は父（神）のなさることを見でする以外に、自分からは何事もすることができない。父（神）のなさることであらばすべて、子（私）もそのとおりするのである。なぜならば父（神）は子（私）を愛して、みずからなさることはすべて子（私）にお示しになるからである。

—— ヨハネ福音書五章十九節 ——  
はつきり言つて、この世の論理がどうの、世間の考えがどうの、というようなことは神と人との關係においては消えて無くなるのである。

キリストさまは、神の前に素っ裸で立っておられる。それは神の眞実の確かさをはつきりと受けて立っているということである。その時、自分の考えとか、自分の思いとか、自分の論理とかいった人のものが、如何に詰まらぬもの、いいかげんなことであるか分かるのである。それが分からぬのは、神の前に素っ裸で立たないからである。だから、立てない者立とうとしない者が、この世の論理をやたらに振り回すのである。それは所詮、神の前では果敢ない人の道でしかない。

キリストさまは、「自分からは何事もすることができません

ん」と言われる。それだからこそ、神のみを誇り、神のみを讃え、神のみを喜び、神にだけ眞実を見、神にのみよりする他なかつたのである。キリストは十字架の死にいたるまでその死にいたるまで神に従順であられたのは、なにも神に従順であることが信仰の人として立派なことだからとか、宗教的倫理において崇高な生き方だからとか、ましてや、そのように生きることが人々によい証となるからだと言うような、人と人との關係を気にしながら為されたのではない。

そうではなくて、自分の身のうえに起る善いと思われれることも、悪いと思われれる事も、また、まったく意味が無いと思われれるような事も、そのすべてが神との關係を抜きにしては、絶対に起り得ないというこの世の事實をよくよく知っておられたので、キリストさまはその十字架の死に到るまで神に従順であられたのである。

世間には、神さまに従つておれば、必ず良いことが起り良い結果になります。だから、苦しんでも辛くても神さまを信じて従うことは大切なことなのです。という人のよい信者や宗教人がいる。しかし、そこにはどこか、人と人との關係で宗教や信仰、また神と関わっているところを、ちよろっと見せられたような気がする。人と神との關係に生きるキリストさまにとっては、信じたから良いことが来るとか、悪いことが起らないとかということはどうでもよいのである。たとえますます苦しくなり悲惨になつたとしても、「私の知っ

たことではない、神に聞いてくれ。わたしの命は神さまによ  
るのだから」と言われるのである。だから、「自分からは何  
事もすることが出来ない」と言われたのである。

あるとき、弟子たちが食物を求めて遠い所から帰って来た、  
「先生、召し上がって下さい」とすすめた。ところがキリス  
トは言われた。

わたしには、あなたがたの知らない食物がある。

わたしの食物というのは、わたしをつかわされた方

(神)のみのこころを行い、そのみわざをなし遂げる

ることである。——ヨハネ福音書四章三二節——

食物を食べているから、自分が生きているのだとキリストさ  
まは思っていない。神が自分を生かしてくださるので、自分  
は生きているのだという、神と自分、神と人間との関係をよく  
知っておられるのである。その事実の前では、弟子たちが、  
食事をとらなければ死んでしまいますよ、と言わんばかりの  
思いで差し出した食物を見て、先の答えをなされたのである。  
食物など要らぬと言っているのではない。食物をとるから  
生きるのだという思い込みが、自分が生きていくという根源  
の事実と、どれほど違っているか、ということにキリストは  
すべての人々が気付いてほしいと願っておられるのである。

ある金持ちの畑が豊作であった。そこで金持ちは

心の中で、「どうしようかわたしの作物をしまってお  
く所がないのだが」と思いめぐらして言った。「こう  
しよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを  
建てて、そこに穀物や食料を全部しまい込もう。そし  
て自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年  
分の食料がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ。  
食え、飲め、楽しめ」すると神が彼に言われた。  
「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去ら  
れるであろう。そうしたら、あなたが用意した物は、  
だれのものになるのか」

——ルカ福音十一章十六節——

キリストさまが、その生涯をかけて示された只一つの道は  
神の道である。それは、万物は神に生かされ保たれ、完成さ  
れる以外に、それ自身ではどうしようも出来ないもののだ  
ということである。人も同じである。自分の力で自分はどう  
することも出来ない者なのである。神の御手が働かなければ  
生まれることも、生きることも、死ぬことも出来ないのであ  
る。その意味で、キリストさまは人がそれ自身で為さねばな  
らない道など、ということとは全くの無関心なのである。人が  
出来ることは只一つ、すべてを感謝して神が備え、与えたも  
うた道を一生懸命に生かされることだけである。

神を口にしつつ、その実、己の計らいを振りかざして生き  
る者は、まことに愚か者である。明日のわたしなど知らない。  
明日の世界などわたしは知らない。神に聞いてくれ。

# みちしるべ

— 聖書 — 愛は人の徳を高める、知識は人を誇らせ、

信じて受けるありがたさ

松下昌義

世間には、ものごとを理屈だけでとらえ、理解しようとする人がいる。そのような方とお話すると、とても疲れる。正直言って、後に何も残らない。もうその人とは今後、出来れば話したくないと思うことがある。

しかし、理屈ではなく心の内に生じる気持ちで、ものごとを和やかに受けとめ、理解しようとする感性のゆたかな人がいる。そのような方と話していると楽しいし、疲れない。そして、話し合ったという気持ちが残る。

だが、理屈によってでもなく、また感性によってでもなく、安心させてくれる人がいる。その人の何がそうさせるのか、すぐには分からないのだが安心を人に与える人がいる。そのような人は特に何かをとりたてて話さなくても、顔を見ただけでほっとし、声を聞いただけで自分の内の暗さが拭かれるような気持ちになる。自分の人生にとって、とても大切なものを分けてもらったような心持ちになり、ずっと以前から自分の一番深いと

ころで求めていたものを、よく知っており、それを確かに与えてくれる方だと思わせられる。このような人との出会いは嬉しく、有難い。

×

理屈だけの人は無味乾燥、なんの味わいもおもしろさもなく、苦痛を覚える。また、感性だけの人は、しばらくはよいが、どこか本当の深みがなく、ついにはものたり無さを覚えてしまう。

しかし、自分の心の一番深いところに安心を与えてくれる人は、ここから信じることの喜びを与えてくれる。

×

ところある人々から偉大な方と言われる人達は決して、理屈の人ではない。また感性の人でもない。無条件に信じたくなるような人である。無条件にとは、知的に於いてではなく、感情に於いてでもなく、真実に於いてということである。その人の内にある真実が、それに触れる者に信じる心と思いを起こさせるのである。

真実の前に立つ時、人はいかなる理屈も自分の勝手な感情も失う。真実に対してはそれらの力は無効となる。つまり、真実は理屈や感情によって掴まえることは出来ない。真実の前に有効なただひとつのことは、それを無条件に信じることだけ

である。

真実の前に立つ時、私達は、語るべき言葉を失う。例えば真実を現わしている芸術品の前に立って、理屈をくどくどとならべたてることは騒音に等しい。また、感情を出して表現しても充分ではない。その作品が表出している真実は、理屈や感情を捨て去って、ただ信じ受け入れるしかほかない。

X X

イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆

は、その教えに非常に驚いた。それは、律法学者のようにはなく、権威ある者としてお教えになったからである。 — マタイ福音書七章二八節 —

群衆がなぜキリストさまの言葉に耳を傾け、その後に従って行ったのかということが、右の聖書が語ることでよく理解できる。

キリストさまは、当時の宗教家たちのように、所謂<sup>いわ</sup>教えを機械的に語り示したのではなく、教えの言葉の奥にある真実を言行了した。権威ある者とは、一切の教えに執<sup>と</sup>られることなく、真実そのものを闊達<sup>かつたげん</sup>言行了した者ということである。

つまり、群衆はキリストの言行に接して、理屈や感情を飛び越えて、自分の心の深みで、この人は確かな方であり、語られることに耳を傾け、従って行っても間違いないお方であると分かったのである。つまり、理屈や感情抜きに信頼したのである。別な言い方をすれば、キリストの真実が、人々

の内にまどろんでいる真実に共鳴し、それを揺り動かし、呼び覚ましたのである。

しかし、理屈や自分の感情を抛り所として、キリストの言行を理解しようとした者たちは、批判し批評するのみで、キリストの真実を自分のものとすることはできない。そのような人は、聞くには聞くが聞かえず、見るには見るが見えず、それ故に、自分が生きることになんの助けも得ることはない。

X X

理屈はいらないとか、感情的な働きは不要だと言っているのではない。そうではなくて、物事の真実というものは、真実そのものによってのみ、その全体が瞬時に分かるのであって、理屈やその人の主観的な感情によって纏まえることは出来ない、と言っているのである。

ものごとを理解するには順序というものがある。真実が分かるにも順序があるのだ。分かる者には、見ただけ、聞いただけ、触れただけで、ぱっ!と分かるのである。一切が分かってしまうのである。そこには理屈はない。どうしてとか、なぜとかいう理屈はない、とにかく分かるのである。これは間違いないと信じ受け入れることが出来るのである。

そうしているうちに、感情が働きだして、すがすがしさとか、力強さとか、安らぎとか、楽しさとか、喜びとか、哀愁とか、畏敬の念とか……さまざまな感情の動きを自分の内に覚えるようになってくる。

さらに、時間がたつに従って、自分が得ているそのものの

構造が少しずつ理解できるようになってくる。「なるほど、ここところが素晴らしいのだな」とか「受けた安らぎはこういう事だったのか」等という、言わばそのものの構造が理解出来、見えるようになって来て、いよいよそのものの素晴らしさ、偉大さがはつきりと分かるようになるのである。

これらのことを順序だてていふならば、「信受」から「情受」そして「知受」に至るのだと言える。

ところが、私達はときとして、ものごとに関わり、それを知ろうと思うとき、まず自分の知を働かせてしまう。つまり知識や知恵によって理解し受けようとする。即ち「知受」しようとする。この態度は、真実を理解しようとする場合には全く間違つた態度である。

例えば、キリスト教の信仰に関心をもち、そこに説かれてゐる真実を理解し自分に受けようとするとき、キリスト教の教義や歴史をどれだけ勉強しても、キリストさまが説かれた真実を、自分のものとして受けることは出来ない。それは、芸術品を理解しようとして、その作品についての理屈をいろいろと学ぶことによって、その作品が秘めている真実の命を理解しようとするようなものである。

作品が秘めている真実の命そのものは、何時、何処で、誰が、どのようにして制作したのか、その形や色彩や線などが持つ意義などの理屈そのものを越えているのである。つまりそれらの理屈をどれほど知識として知つたとて、その作品が

秘めている命には至らないのである。作品の真実は、直接にそれを尋ね求める者の真実のところに、理屈や感情を飛び越えて、瞬時に結びつき、その者の魂に平安と喜びとかなどを与へ信受せしめるのである。それが、ものごとの真実に触れる最初の姿なのである。

「キリスト教」を知りたければ、その道の学者に聞けばよい。そのような学者は世間には掃いて捨てる程おいでになるし、そのような方が書かれた書物はピンからキリまで、本屋さんにも山と積まれてある。

しかし、真実の命に触れたいと願うならば、先ず素直な思い、謙虚な態度、つまり自分の真実心で真実を尋ね求めることが大切である。その時、向うの真実がこちらの真実心に共鳴し、一切の疑いの思いが消え去り、信ずる思いが心地よくしかも力強く内面に湧き出て、真実を一挙に信受せしめる。その間の心の事情を、キリストさまは次のように言われた。

こころの清い人たちは、さいわいである。

彼らは神を見るであろう。

こころの貧しい（謙虚な）人たちは、さいわいである。神の国（真実の命のはたらき）は、彼らのものである。

— マタイ福音書四、三 —

真実を受けるには「知受」の態度が第一ではない。「信受」の姿勢こそ第一なのである。一方、感情（感性）の動きでも



て真実の命を受けようとする人がいる。しかし、感情はきわめてその個人の世界でもある。つまり、とても主観的な働きなのである。例えば、真、善、美、と言われることがらについて、それに関わる人それぞれによって少しずつ異なる。ある人はこれを美と観るが、ある人は同じものを見て、美とは観ないかもしれない。このように、感情の働きはいつも主観的である。強いて言えば、それは人それぞれの好みによって違うのである。だが、そのような感情の働きは、少なくとも「知受」の働きよりは、深い世界に浸透する射程距離をもってゐる。だが、先にも言うように、その働きが主観的であるという意味で、独断と独善になる危険性を伴っているところに、その限界があるといえる。かつて、真実の命に生きた人や真実の命を現わした芸術品が、独断と独善の偏見感情を持った権力者やその類の人々によって、どれだけ誤解され虐げられてきたことか、過去の歴史を省みると明らかである。

「信受」でかかわる者のみが、ものごとの真実の命に触れることが出来る。その後で「情受」でその豊かさを味わい、さらに「知受」のかかわりをおして、真実の命の構造を理解するに至るのである。しかし、いつの時代にも、この順序により真実の命に至るものは少なく、「知受」で真実を見極めようとしたり、さらに進んだものとしても、「情受」にてそれに迫ろうとするに止まる者がほとんどである。

キリストさまは、たびたび「信じなさい」と勧め、「あなたは信じるか」と迫られた。そして、「信じる者は幸いです」と申された。しかし、「知受」のかかわり方こそ最も正しいと思ひ込んでゐる者にとっては、それは愚かなことのように思われるのである。しかし、何度も言うが、真実の命の前には「知受」のかかわり方や態度は、まったくその意味を失うのだ。齒が立たないのだ。

真実の命の働きに眼が開かれる時、人はその真実の命に対して「わたしは信じます」という言葉の他、どのような言葉も、態度も通用しなくなることを知るのである。そのとき、その言葉と共に、真実の命の世界をすべて受け、理屈を越えて領解し、その者の心は喜びに満たされる。「信仰をもってものごとに関わる」ということの偉大さはここにある。

なにごととも軽々しく「信じ込んでしまふ」ことが信仰ではない。それは、なにごとでも理屈でかかわろうとするのと同じくらい、真の意味で智慧の欠けた愚かなことである。

私達が見聞きする一切の内に真実の命が秘められ、その命によりすべてが動き、生かされ、存在している。それをイエスさまは「神の国」と言われた。それは、真実の命の働きそのものことだと、私は理解している。また、それこそがキリストと言われていることなのである。

イエスはキリストである真実自体を生きた。このキリストに与るとき、人は歡喜に満たされる。そして、それに与る方法はただ一つ「信受」の態度しかない。

# みちしるべ

神は、はじめに天と地とをつくられた。 — 聖書 —

人にはできないが  
神にはできる

松下昌義

人には出来ることと、出来ないことがある。出来ることをしないのは怠惰である。出来ないことを為そうとすることは傲慢である。

自分が出来ることからよく弁え知っている者は智者であるが、自分が出来ないことがらをよく知っている者は、それ以上の智者ではないだろうか。彼は、ソクラテス同様に「無知の知」の保持者である。だから、自分に出来ないことを出来る者のように思い込んでいる者は最大の愚か者である。

× イソップの寓話に「牛とガマ」の話がある。

牛が水を飲んでいて、ガマの子を踏みつぶしました。その場にいなかった母親がやって来て、その子の兄弟たちに、あの子はどこにいるのかとききました。

「おっかさん、死んじゃったよ。ついさっき、大きな四つ足がやって来て、ひずめて上からつぶしてしまっただけ」

そこで、ガマはからだをふくらませて、「そのけものは、こんなに大きいか」と、ききました、子どもたちは母親に、

「およしなさい。齒ざしりをして、だめだよあのけもののように大きくならないうちに、自分のほうがまんなかからはじけるよ」と、いいました。

小さな生きものが、大きなけものと同じようになろうとするのは危険です。

— 岩波少年文庫「イソップのお話」—

これを書いたイソップの意図がどこにあったかは別として、私はガマの母親の姿に、神というものの前に立つ自分自身の愚かな姿を写し見ると共に、キリストが弟子に語られた「人には出来ないが、神には出来る」という言葉を思い出した。

× 人にはできないが、神にはできる。

— マルコ福音書十章二七節 —

この言葉が持つ意味は深い。この言葉は次のような状況の中で語られた。

ひとりの誠実な人がイエスにたずねた。全き安心を自分に得るためにはどうすればよいでしょうか。イエスは答えられた、自分の持っている全財

産を捨てて、わたしに従いなさい。誠実なその人は、それを聞いて悲しみながらイエスのもとを去った。これを見ていたイエスの弟子たちが言った。「それではだれが救われることが出来るだろうか」と。そのとき、イエスは彼らを見つめて言われた。「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」と。

これらについては、新約聖書マルコ福音書十章十七節から三一節までの記事を是非読んで頂きたい。

私達は、人には出来ない、ということを深い意味で理解していない。しかし、本当に、私達は何も出来ない者なのである。そうです、何も出来ない者なのだ。一体私達が何をしたらいいのか。自分の力でできたものなど、どこにもない。これは、理屈ではなく、本当のことなのである。

すべてはすでにあったものであり、既にあったものを頂いて、用いさせてもらっている者にしかすぎない。肉体も智慧も物も、すでにあったものであり、それらを用い働かせて自分に利用しているにしか過ぎない。

肉体に必要な物がなくては私達は一日も生きて行けない。また、たとえ必要な物があっても、命の根源的な活性力がなくなれば、私達は瞬時に死ぬ。

このように、私達は物によって生きていくのではない。また、自分の意志や智慧によって生きていくのではない。こういうなれば、私達は生かされて生きている者なのである。こ

の私達の存在の事実を、「人には出来ない」とイエスは、そのまま正直に素直に言われたのである。

「人にはできない」という告白は、人を見ることに於いて透徹した自然な見方である。そこには特別な暗さも明るさも無い。力みも悲壮さも無い。動も静もない。ただそのようにいるものを在ると素直に言っただけである。

にもかかわらず、私達は素直に自分の存在の事実を受け入れようとはしない。「人にはできない」というこの事実に見覚えななら、どれだけ私達は心身ともに楽になることか。

先のインソップの寓話に登場したガマの子供は、自分たちがガマであるということ、そのまま受け入れている。そこには卑屈さはない。ガマがそのままガマであることを素直に受け入れてガマでありつづけている。しかし、母親のガマはそうではない。自分がガマであることを忘れて、牛のようになろうとする。

「およしなさい。歯ぎしりをして、だめだよ、あのけもののように大きくならないうちに、じぶんのほうがまんなかからはじけるよ」と、母親にガマの子供はなんの銜いもなく言う。しかし、ひとり母親だけは力んでいる。そして、その力みが自分自身を破滅に導くのだ。そこには不安と悲しみと失望と自己破壊だけがある。

イエスの前にひざまずき、絶対の平安を求めた誠実な人も



人間としての自分の存在の本当の姿を見ないままで、自分になにかを為すこと、なにかを持つことによって、自分に平安を得ようとした。彼は自分の存在の根本のところまで「自分には出来る」という、自分に対する誤解を持ち、力みを持ち、従って、自分を素直に自分として認めることが出来ない歪みを持っていた。だから、イエスは「あなたの持っているものを全部捨ててしまいなさい」と言われたのである。

それは、捨てるのが目的ではなく、捨てることによって見える自分のありのままの姿を見るための方便にすぎなかったのである。

「人にはできない」ということに目覚めるといふことは、再び言うが、決して卑屈になることではない。弱くなることでもない。本当の自分に目覚めることである。自分であることの安心を得ることなのである。

人には「できない」といふことは「できない」といふことではなく、それは、「白い色」を「白い色」と素直に見ただけといふことと同じである。もう一度いふが、「できない」といふことは、「力が足りないからできない」といふことではなく、ただ、素直に、できない、というだけのことである。どのような思いもない。

x

x

「人にはできない」といふことは、人は自分自身を支える根拠をもっていない、といふことである。人が立てるどのようにならぬことが、決して人の根拠とはならない。哲学も科学

も芸術も文化も宗教も政治も、その他どのような富みも財産も物質も、決して人を立てる根拠とはならない。それらは、人が生きて行くためには必要なことや物ではあっても、人が人であることの根拠ではない。それが証拠に、それらは結局人の死とともに無くなり消えてしまうものなのである。

勿論、自分自身も自分の根拠にはならない。自分は自分であるといふことは、決して自分の根拠にはならない。それが証拠に、自分は自分であるといふ自分など、どこにもなく、掴みようがない。それは幻想なのである。

本当の根拠とは、人が死んでも生きても無くならないものである。それが生きることの根拠にならなくては、人は真実救われ、大安心を得ることはない。

x

x

わたしと言う者の成り立ちは、私には無いといふことが「人にはできない」といふことである。ここで、再度言うが、人には根拠がないとか、わたしという者の成り立ちは私にないなどと言っても、それは決して、人が弱い者とか、私が力不足だからとかいふことではなく、人はそのまま単純に素直に「人にはできない」と事実を事実として指摘しただけのことである。だから、「人にはできない」といふことを、悲しむことも、ましてや、悪いことのように思ってはならない。ただ、素直に「そうでありませぬ」と事実を事実として自覚すればよいのである。この時、はじめて人は落ち着くことができるのである。ちなみに、落ち着くとは、落ちる処まで落ちて

底に着いた、というように理解するならば、もはや、それ以上に着くようがない安心を得る。つまり、力んだり悲壮になつたりすることなく、そのままの自分をそのままに見ることが出来る落ち着きを得る。それが「人にはできない」ということなのである。

わたしたちの生きている根拠は、どのような意味においても全くわたしにはないということが「人にはできない」ということであるならば、「神にはできる」と言う意味は、わたしという者の命の成り立ちの根拠は、全くわたしを越えたところにあるということなのです。

わたしが死んでも生きて、また、どのような生き方や考え方を持っていようと、それらとは全く関係なく、すべてを抱え、支え、保持し、完成せしめる命の源の世界そのものが「神にはできる」ということなのである。そして、それこそ、人が生きている根拠なのである。だから、つぎのように言うことが出来る。「人にはできない」というその現実をそのまま、直にまる抱えしている世界が「神にはできる」ということなのである。

「神にはできる」という世界は、「人にはできない」という世界と別々にあるのではない。一方は聖く、一方は汚れていて、交わることなくあるのではない。別々でありながら、同時に聖が汚をまる抱えしているのである。そのような現実

をイエスは「神のゆるしがなければ、頭の毛一本たりとも落ちない」と言い、「空の鳥も」「野の花も」すべて一切が「神にはできる」という世界に保たれているのだ、と提示されたのである。

だから「神にはできる」ということを、神は万能な方であるから、人には出来なくても、何でもできるということである、と理解してはならない。もしそれが神というものならば神は超人であり、ウルトラスーパーロボットになってしまう。つまり、能力の差が人と神とを分けるだけとなる。そのようなものは決してどのような意味に於いても根拠とはなりえない。

「人にはできない」という者が「神にはできる」という命に、そのまま包まれ生かされ育てられ、完成させられて行く。なんと有り難いことであろうか。

すべてが「神にはできる」という命を映し出している。まさに、「万物は神の栄光をあらわし」ているのである。

「神にはできる」という命の恵みを「人にはできない」というところで、そのままに触れることが出来る、交わることで出来、その命をいただきそれによって育まれている。なんと有り難いことであろうか。

「人にはできないが、神にはできる」「人にはできないが、神にはできる」……ここにこそ、私達の生きる希望と平安との根拠がある。その人はもはや死ぬことはない。

# みちしるべ

知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める — 聖書 —

## 生きる根拠

松 下 昌 義

人は誰でも、自分について、ある種の不安を持って生きている。私には不安など何も無い、と言う人でも、やはり自分の思いの深いところで不安を持っている。私には不安などないと言うのは、その人自身が未だ、自分の深くにある不安の思いを自覚していないからだろう。

× ×

私たちが自分の深くに持っている不安とは、一体どのような不安なのか。それは、自分の存在の根拠についての不安ではなからうか。

言い方が少し堅苦しくなってしまったが、簡単に言えば、自分というものの根っこについての不安なのである。根っこが無い花や樹のことを考えればすぐに理解出来る。いくら美しい花が咲き、立派な幹に沢山の実をならしめていても、それらの花や樹に根っこが無ければ、いずれは枯れて朽ちてはてる。茎や幹が大地に確りと根づいていてこそ花も樹も安心出来るのである。

私たちについても同じことが言える。自分という存在に確りした根っこがなく、しっかりと自分を支え養う大地が無ければ、私たちの人生は一時の夢であり、やがて朽ち果てて無くなる空しい幻想にしかすぎない。

勿論、それでよい、という者もあろう。しかし生きて在る者として、自分の存在に根っこが無いという不安は、決してなくなることはない。

× ×

私たちは、自分がなにかに夢中になっている間は、それによって自分が満たされているので、生き甲斐を感じる。少なくとも不安などない。だが人はいつまでも、夢中になれる何かを持ちつづけることは出来ない。

例えば、恋にいつまでも夢中になってはいられない。いつかは覚める時が来る。子育てに夢中になる親も、子どもが成人するに及んで終わる。仕事に熱中することも時とともに想い出の一つとなる。また、若さも美しさも衰え、いつまでも保持できない。そして歳をとることによって、生き甲斐と感じ夢中にさせてくれたすべてのことが、まさに、夢の中のことであり、自分にとって一時の幻想にしか過ぎなかったことに気づく。

× ×

わたしは今、私たちの人生の出来事がすべて無意味であるなどと、虚無的に語っているのではない。人が恋をすることも、親が子どもを熱心に教育することも、また、仕事をすることも、趣味を持つことも、人生の事としてその人にとって意義があり、それはそれとして素晴らしい人生の出来事である。しかし、私たちがここで、自分自身に問うてみたいことはそれらの事柄が、自分の存在に本当に安心を与えてくれるのか、ということだ。誰もが自分の深いところに持っている自分の存在についての不安が、それらの人生の出来事では決して癒されることはないということである。

×

×

私たちは、自分が病に倒れたり、極度な苦難に出会い、どうすることも出来なくなったとき、はじめて、自分という存在に、支えとなり、頼りとなって安心を与えてくれる根っこがないことに気づく。それまで、自分に頼りになると確信していたすべてが、その裏、自分の存在にとって、まったく空しいものであったことを知るのである。

そのとき、自分がそれとなく抱いていた自分についての不安が何であったのかというその正体に目覚めるのである。

つまり、自分の存在に根拠を持っていなかったことに気づくのである。それは、根の無い樹のような存在が自分であり、切り花のような姿が自分にほかならないことに目覚めるのである。

自分自身の存在に根拠を持たない者は、不安と失望と諦め

との内に死ぬ。そして、その魂は、自分の存在の根拠を求め、いつまでもさ迷うことになる。

×

×

人は神に出会うまで安心を得ることはできない、とある人が言った。それは、人は自分の存在の根拠を得ないかぎり、本当の安心を自分に持つことは出来ない。ということを語ったのだと思う。彼は、人間の根拠を神と言ったのである。それは、人間の根拠は人間の世界の内にあるのではなく、人間を越えたもの、即ち神の元にあるのだと告白しているのである。人間である私という者の存在の根拠が神にある、ということはなんと素晴らしいことであろうか。私の生きているその支えが、拠り処が、ちっばけな自分や果敢ない物にあるのではなく、永遠であり、真実である神にあるとは、なんと素晴らしい有り難いことであろうか。

肉体が滅び死ぬことによって、無くなってしまうようなものは、本当の根拠ではない。死んでも生きても無くならないものこそ、本当の根拠となるのである。

×

×

「元始に神は天地を創造された……」これは、聖書の最初にある言葉である。聖書はこの言葉で始まる。

これは、宇宙生成の科学的な説明ではない。そんな貧弱な内容の言葉ではない。それは、宇宙そのものの存在の根拠を提示した言葉である。

しばらく、その聖書の言葉に耳を傾けてみよう。

元始に神は天地を創造された。地は形なく、むなし  
くやみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてを  
おおっていた。

神は 光あれ と言われた。すると光があった。神  
はその光を見て 善とされた……

……神は自分のかたちに人を創造された。即ち 神  
のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼  
らを祝福して言われた。生めよ、ふえよ。地にみち  
よ。地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に  
動くすべての生き物とを治めよ……全地のおもてに  
ある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべ  
ての木とをあなたに与える。……  
神が造ったすべての物を見られたところ。それは  
はなはだ善かった……

旧約聖書 創世記一章一節以下

ここには、私達人間の存在の根拠だけでなく、私達がどの  
ような者であり、どう生きるべきかという、その生き方や在  
り方までが示されてある。このころみに、少しそのことについ  
て記しておこう。

「神は自分のかたちに人を創造された」という、その意味  
は、神が人間を自分に相い対するものとして、自分の愛の  
対象として造られたと言うことである。これは、私という  
者がどのような者なのかということを知る基本となる。ま

た、「すべての生き物を治めよ」とは、人が好き勝手にして  
も良いということではなく、神に愛されている者に相応しい  
思いをもって、すべての生きものを善く管理し関われ、とい  
うことである。このことは、人がこの地上でどのように生き  
ねばならないのかという生き方、在り方の基本の提示だとい  
える。さらに、「神が造ったすべてのものを見られたところ  
」それははなはだ善かった」という「善かった」とは、神の  
目的に適っている、ということである。

しかし、今日の人間の生き様を見ると、この神の願いか  
らどれほど逸脱してしまっていることだろうか。人はその傲  
慢と欲とに引きずられて、神の創造における自然の定めや願  
いから、遠く離れ、自ら混乱と滅びと破滅への道に向かわし  
めている。

以上のように、聖書は、ひとりキリスト教のものではない。  
私たちが人間のだけれども、心して自分自身の生き方、在り方  
を深く省みることが促すとともに、喜びと平安に生きる根拠  
を与え示すものなのである。

×

×

天地が神に創造されたということは、天地が神の願いの下  
にあるということである。なかでも、人はその神の願いを自  
覚出来る能力、即ち精神を与えられている。その精神性を靈  
性と言い換えることができよう。漢字遊び風に言えば、精神  
とは神に精（くわし）い、とか（つまびらか）とか読むこと  
が出来ることが、とにかく、神に願われている自分、神のその願

いを知り、且つ、自覚出来る精神を持っているのが私達人間なのである。

とにかく、私達人間が願う以前に、神に願われている存在が私達なのである。再度言うが、私達は願う存在ではなく、神に願われている存在なのである。だからこそ、生きることが出来るのである。私達人間の生きる根拠は、神の願ひそのものにあるのであって、それ以外のどこにもない。

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、御子キリストをお遣わしになった。ここに愛がある。

—第一ヨハネの手紙 四章十節—

人が神に願われている存在とは、あたかも子どもが親に願われている者であるのと同じである。子どもは、親に見つめられ、親の愛に相對しているので安心して生きるのである。親の願ひと愛情の眼差しが子どもの生きる支えであり根拠なのである。そこに自分の根っこを持っている子どもは、決して倒れ歪むことなく育つ。しかし、そのような根っこを持たない子どもは、歪み不安が彼を包む。どのような人も同じである。自分に根拠を持たなければ歪む。そして安心がない。

私たちが願う前に、神がわたしに対して願ひをかけていてくださる。これは、私達が生きることの秘密である。私達はいつも自分勝手な願ひだけで日々を過ごしている。ああ

してほしい。このようでありたい。あの人がこのようにしてくれない。このようにしよう。あのようになろう。……しかし、それは決して自分の生きる根拠にならない。私達の一切の願ひや思いに先立って、先ず、神の願ひが私達を包んでいる。愛の眼差しが注がれている。重ねて言うが、これこそが私達の生きる根拠なのである。

私達が神に願われているということは、私達が神に語りかけられているということでもある。また、神に呼ばれているということでもある。

その意味で、私達の祈りは、神の語りかけを聞くこととする姿である。神の呼び掛けを素直に受けようとする姿である。だから、サムエルは、「僕は聞きます、神さまお語り下さい」と祈った。

われよべば みえきたるなり  
わがよぶは みえきたるものこのころのうごきのゆえならん もつたいなしとなえんか

みえきたらんとするもの よぶがゆえにわれもよぶ  
そのものわれによぶころをうごかすごとし

—八木 重吉—

わたしたちが愛するのは、神が先ず私達を愛して下さったからです。

—第一ヨハネの手紙 四章十九節—  
自分の生きる根拠を神に見出すものは幸いである。



# べしるちるみ

空の鳥を見よ。野の花を見よ。

—聖書—

## 有りのままを見る

松下昌義

この世を、有りのままに見る智慧を人に得させる働きをするものが、宗教だと私は思っている。

私たちは、この世を有りのままに見ることなく自分勝手なものの見方をして生きている。その意味では、すべての人が宗教的智慧を必要としている。しかし、人はそのような宗教的智慧が自分に必要なことだとは夢想だにしていない。ただ、その智慧に目覚めた少しの人のみが、その智慧のありがたさを体得して、安心と希望とに生かされている。

宗教的な智慧を得た人は、この世の有りのままの世界に目覚める。その人は、今まで自分が見て来た世界が、実は自分の思い込みの世界であって、ただ自分の表面的な感覚で見ていたにしか過ぎなかったことに気づく。

とは言っても、宗教と名のつくものに属し、その信仰を持っているそれらの人が、すべて宗教的な智慧を得ているとは限らない。

その宗教の教義を知り、その宗教の儀式に与かり、その宗教の教えを信じているということと、有りのままの世界に目覚めるといふ宗教的な智慧を得ているといふことは、何の関係もない。

今日の日本の社会の一つの現象として、宗教又は、宗教紛いのことに多くの人達が関心をよせている。世間では、これを第三次宗教ブームと言っている。しかし、はたして、宗教ブームなのだろうか。これらの社会的な現象を見ていて、私には極めて世俗的な以て非なる宗教ブームであり、それはとても危険な社会的現象だと思われる。その理由は、それらのものが、人間の感覚的な欲望の延長線上に生じている現象にすぎないと思ふからである。

だいたい、世俗的と言われることがらは、人間の感覚的な欲望を満たすものをその基本としている。食欲や性欲を満たす感覚的な快につながることは、人は群がる。物欲や名誉欲や権力欲につながることも、人はわれ先に集まる。人は自分が何らかの得をすることには関心を寄せ、損をすることがからは逃げ出す。

今日の宗教ブームと言われている現象に於いて宗教を与える側にも、受ける側にも、先に述べた

極めて世俗的な欲望が働いているのが見え感するのは、わたし一人ではないだろう。賢明で透徹した本当の智慧を持っている人は、そこにある嘘と誤りとを見抜いている。

この世を、有りのままに見る智慧を持つとはどういうことなのだろうか。それは、自分の都合のよいように見えないということである。私達は何時も自分の都合のよいように見たり聞いたりしている。語っている時に盛んに首をたてに振って共感して下さる方があるが、後でそのことお話していると、私の思いとはまったく違った了解をしていらっしやう。しかも、きわめて世俗的な感覚で共感しておいになつたりすることがあつて驚くことがある。ひょっとすると、かく言う私自身も同じことを人さまに對してしているかもしれない。それにしても困ることは、「よいお話を聞かせて頂いて有り難いのだけれど、でもね、世の中というものはそのような建前どおりにはいかなないので……」などと、有り難いお話が、建前のこととしてかたづけられてしまい、あげくのはては、「先生はお堅いお方だから……」と、誉められているのか、貶されているのか分からなくなってしまうことがある。まことに、私達は自分の都合どおりにもものを見たり聞いたりすることを捨てて、物事を有りのままに見ることが出来ない者である。

それにしても、この世の中をありのままに見ると、どのように見えるのかというと、それは、すべてが同じに見えるよ

うになる。

私達はこの世を分け隔てをして見てしまう。あれとこれとを分けて考え、この人とあの人とを比べる。そして、よし悪し、善悪、偉いとか偉くないと言つたように価値判断をして分け隔てをしてしまう。

しかし、有りのままに見える智慧を得ている者には、すべてが同じとなる。なぜならば、この世の本当の姿は、そのままですべてが同じだからである。

使徒パウロは次のように言う。

神がお造りになつたものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはない。

——テモテ3・4——

さすがはパウロである。彼はものごとを有りのままに見る眼力を彼の信仰によって得ている。次のようにも言う。

それ自体で汚れたものは何もないと、わたしはイエスによって知り、確信しています。汚れたものだと  
思うならば、それは、その人にだけ汚れたものです。

——ロマ14・14——

ものごとに汚れをつくり清さをつくるのは人の思いである。敵をつくり味方をつくるのも、人の思いである。人が自分の思い、感覚的な欲の思いに留まる限り、有りのままの世界は



見えず、たえず分け隔ての嵐の中で悲しんだり喜んだり、羨んだり有頂天になつたりして日々を過ごさなくてはならない。先に記さなかつたが、パウロは、キリストに任つてこの世を見る時、男も女も、さらに生も死も消えてなくなるとうまで言う。有りのままの世界とはなんと澄み切つた世界なのだろうか。この世の本當の姿がそれなのだを知るなら、私達はなんと卑しい思いでこの世を見てしまつてゐるのだろうか。

今、あらためて山上でお示しになつたイエスの言葉を思い出す。「幸いなるかな、こころの貧しい者、神の国はその人のものである。」私達が自分の思いの一切を捨てて、まったく素直になり、この世を見ると、そこに、あふるるばかりに漲つてゐる神の恵みの働きを見ることが出来るだけでなく、さらに、その恵みの命に生かされてゐる自分と万物との姿を発見するのである。使徒パウロはその命の世界に、キリストを信ずる信仰により開眼せしめられた。そのような自分を、「古きは過ぎ去り、見よ、新しくなつた」と歎喜した。彼は欲と争い、悲しみと苦しみ、矛盾と不条理に満ちたこの世の其処に、神の恵みの命が溢れ漲る有りのままの世界に、つまれ生かされてゐる自分の現実を見たのである。

X

X

有りのままの世界が世俗の世界とは別なところにあるのだと思つてはならない。有りのままの世界は、初めから終わりまで、私達が生きて立つてゐる此処、即ち世俗の世界のただ中にあるのである。言うならば、有りのままの世界が即今私達が立つて生活してゐる世界なのである。また、今私達が立

つて生活してゐる此処が、即有りのままの世界なのである。有りのままの世界が、あたかも理想の世界のように、私達から遠く離れた処にあるのではない。

だから、キリストさまは次のように言われる。

神の国は、「ここにある」「あすこにある」と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたのただ中で躍動してゐるのだ。

——ルカ福音書十七章二一節——

わたしの理解に於いては、有りのままの世界のことを、キリストさまは「神の国」と言われたのである。神の国とは神の命がそのままに躍動してゐるところといふことである。それはそのまま愛の滴ち満ちてゐるところである。分け隔ての想念がなく、すべてがその有りのままの一つであるような世界、それを神の国とキリストさまは言われた。

そのような神の国、即ち有りのままの世界が、「あなた方のただ中で躍動してゐる」と言われるのである。

X

X

キリストさまがその生涯をかけて提示なされたことは、私どものただ中に躍動してゐる神の国、即ち有りのままの世界だったのである。

すべては、それから生まれ、それによって保たれ、それによつて完成され、それへと帰つて行くのである。人も物もその他一切がそれによつて在るのである。

有りのままを見る智慧を得た者には、その世界こそが現実であり、事実であることに気づく。だからこそ、その世界に目覚めた者は、声も高らかに詩うのである。

もろもろの天は神の栄光をあらわし

大空はその御手のわざをしめす

その日、言葉をかの日につたえ

この夜、知識をかの夜におくる

語らず言わず、その声きこえざるに

そのひびきは全地におよぶ……

—旧約聖書詩篇一九篇—

私達の足下に在って私たちを生み、育て、保ち、完成する神の命の働きは、まことに悠々閑閑として、一切を抱き抱えている。地球と星々、光りと風と大地、人と動物と植物、そして人が生み出す一切のもの、文化、芸術、科学、宗教、その他一切を保持し立たしめている。

勿論、「キリスト教」も例外ではない。それは一輪の花が咲くが如くに「キリスト教」も在る。花に初めがあり終わりがあつたように、「キリスト教」にも初めがあり終わりがあつたやがて、神の命の世界に消えて行く。

それ故に、だれも誇ることはない。それ故にだれも悲しむこともない。ただ、自らの足下に躍動する神の命に気づかぬことに謝念を抱くべきである。

×

×

キリストさまは、ご自分がこれ神の指、また神の言葉と化して、私達の足下に躍動している神の命を示し、語られた。

私達を支えている神の命は空を飛ぶ鳥に秘められ、野に咲く名も無き草花にも秘められ、又、生活のあらゆる出来事にその命の営みの姿が隠されていることを教えて下さった。

それゆえに、鳥や花を見よ、と言われ、身近な生活の様子を譬えて語り、耳ある者は聞くがよい、と言われた。

このようにして、神でないものが神の力を受けて、神でないままで即神を示し、限りあるものが限りあるものそのままに即神を語らせられる。そこを見、そこに聞けと言われる。

このように、神の命の支えと営みが無ければ、生きることもしぬことも、在ることも無くなることも出来ないその命の姿が、有りのままの世界なのであり、私達の生活のそこに躍動してわたしを私にしているのである。

×

×

しかし、私たちはそれに気がつかない。それが見えない。それが聞こえない。いつまでも自分の場に留まって、そこから見、聞き、考え、欲し行動する。

このような私達に、神は、見えない神の命を万人に見え、万人に聞こえるように示し給うた。それがキリストさまの十字架の死である。十字架の死は私達に対する神の命の究極的な愛の提示である。完全なる自己犠牲、自己奉獻にほかならない。すべてを包み、すべてを赦して生かそうとする神の愛の自己顕現なのである。そのような命の営みが、私達の現実の底にある有りのままの世界である。

# べしるちみ

— 聖書 —  
よを得る命の永遠を保ち自分に神の愛の中

地には平和人にあれ

松下昌義

イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟のほうが父親に、「お父さん、わたしが頂くことになっていて財産の分け前をください」と言った。それで父親は財産を二人に分けてやった。何日もたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ちそこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使ってしまった。何もかも使い果たしたときその地方にひどい飢饉が起って、息子は食べるにも困りはじめた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話させた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人にあり余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここを立ち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。

雇い人の一人にしてください」と。そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。

ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き接吻した。息子は言った。「父さん、わたしは天に対しても、また、お父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」しかし、父親は僕たちに言った、「急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手には指輪をはめてやりなさい。足は履物を履かせなさい。それから肥えた子牛を連れてきて屠りなさい。祝おう。この息子は死んでいたのに生き返りいなくなっていたのに見つかったからだ。」そして祝宴が始まった。

— 新約聖書 ルカ福音書十五章 —

ここで、イエスさまが私たちに示されることは「愛」ということである。以下は愛について、すこし思いをめぐらしてみよう。

それなくしては生きられず、しかもそれによって傷つくもの、それが愛であると青年のわたしに教えてくれた人がいた。本当にそのとおりだと今さらのように思う。彼は更に言った。愛によって

人は結びつき、同時に最も深刻な敵対関係におちいりかねない。それはいつかは欺く。他を欺くのみならず、己を欺く。われどれが身を窺地へ追い込むような作用をもっている。この上なく美しく、しかも恐るべきは人間の愛であると。

自分の人生を多少でも歩んで来た者ならば誰でも、彼の語るところに深い共感を覚えるに違いない。

「この上なく美しく、しかも恐るべきは人間の愛である」とは、そのまま、私たちの生の矛盾を語っている。人は愛の中に天国を味わい、その愛によって地獄を味わう。愛は確かに「偉大なる虚構」だと言えよう。

たしかに、愛は偉大なる虚構である。しかし、虚構だからとてそれを人は捨て去ることは出来ず、逃れることも出来ない。虚構にも関わらず人はそれに引かれなければ生きて行けず、虚構を背負って生きて行くしか術がない。それが私達人間存在の矛盾であり苦悩でもある。

人はすべてこのような愛の矛盾の狭間で苦しみつつ喜び、喜びつつ苦しみながら生きている。分かち合うては奪い合い、奪い合つては分かち合う。助け合つては憎しみ合い、憎しみ合つては助け合う。会うては別れ、別れてはまた会う。殺し合つては生かし、生かし合つては殺し合いつつ生きている。憐れみを抱きつつ残酷であり、残酷でありつつ憐れみ深く生きていく。まさに、人間存在の美しさも醜悪さも愛にある。

しかし、このような愛に生きているかぎり、私達はいつまでも、美しさと醜悪さの狭間をさま迷い続けるばかりで、真の

平安を得ることなく、また平和をこの世にもたらずことも出来ない。

それにしても愛は偉大な虚構なのだろうか。美しさと力と命に満ちた事実が愛ではなかったのか。創造的な命そのものが愛ではないのか。人々が自分を本当に生かす命として求めている愛はそのような愛ではないのか。

イエスさまが語り、聖書が示す愛とは、偉大な虚構としての愛ではない。偉大な虚構の愛は日常世俗の中の何処にでも見ることが出来る。人々は虚構としての愛の幻想に振り回され、いつも泣き笑い、喜び悲しみ、歎息して天使となり憎しみと怨念で地獄の鬼と化している。「恐るべきは人間の愛である」と言われるように、それらは「人間の愛」にほかならない。しかし、イエスさまが語り、聖書が示す愛は「人間の愛」ではなく「神の愛」である。

イエスさまは人の愛を行じたのではなく、神の愛を自ら行じることによって、愛の偉大さの事実を提示なされた。冒頭に掲げた、放蕩息子のお話もその例外ではない。

話に登場する父親は神であり、息子は人間である。父を神に置き換え、息子を人間に置き換えて読むなら、イエスさまが私達に示そうとすることがよく理解できる。

息子は自分のことだけを考え、権利を主張し、父から財産を奪い取り、自立への自信を拠り所にして、父を捨てて出て

行き欲するままに生きた。だが、破滅はすぐに来た。破滅とは、自分の生きる拠り所、わが身の置き処を失うことである。人は決して自立することは出来ない。自立できる程に人は完全ではない。私達は限りある者である。その肉体に於いても、その智慧に於いても限りある者である。にも関わらず自分があたかも肉体に於いて、智慧に於いて完全な者であり、したがって完全に自立できる者であるかのように思うことは、自信過剰、傲慢な態度、または思い込みであり自分自身に対する幻想にしかすぎない。

しかし、人間の歴史は、この幻想に振り回されることにより、さまざまな悲劇を個人に於いて、国家に於いて、世界に於いて生みだして来た。まさに近代とはそういう時代であった。そうして今、ようやく、さまざまな犠牲を払うことによつて、人は己の拠り処が人以上のところにあるのではないかと感じはじめている。

かの息子も、自分が拠り処としていたものを失うことによつて、はじめて自分の拠り処が決して自分でないことに気づくのである。それは他でもなく、自分の限界に目覚めることにほかならない。そのとき、捨ててしまった父、忘れていた父の処に思いを向ける。自分を生み、自分を育てた、自分の存在の根拠がどこにあったのかということに、少しづつ目覚めはじめた。自分を救い、本当に生かしてくれるものが何であるかということに目覚めはじめたのである。

それでも彼の思いは暗く重たかった。捨て切ることができない自我が、思いの深い処に尚もうごめき、自分自身の智慧や力に留まろうとさせるものが彼を引っ張った。自尊心である。虚勢である。素直に自我の敗北を認めさせない思いである。だから彼は「雇人の一人として貰おう」と思う。

雇人の一人となることによつて父の前に自分の面目を立て自尊心を捨てまいとする。彼はその思いで自分を納得させ、自分を父に向かわせた。彼は正に、絶望しながらなおも、自身に留まろうとする絶望者なのである。絶望しているようで、その実絶望してはいない、否、したくないと思う虚勢の自我、傲慢の自我が、彼の心の深くで不気味に蠢いている。まことに、人は自分自身の弱さを認め、徹底して謙り、謙虚と素直になるには、なんと困難なことであろうか。度し難きは我が身である。罪悪深重なるは我が身である。罪深きは我が身である。

しかし、そのような息子を父はみごとに救った。その出来事の下りを、先のイエスさまの言葉にもう一度聞いてみよう。

……彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠くに離れていたのに、父親はむすこを見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

……父親は僕たちに言った、「急いでいちばんよい服を持ってきて、この子に着せ、手には指輪

×

×

をはめてやりなさい。足に履物を履かせなさい。それから肥えた子牛を連れてきて屠りなさい。祝おう。この息子は死んでいたので生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」それから祝宴が始まった。

息子を救ったのは父の愛である。絶対無条件の愛である。息子の善悪、美醜、過去も現在も価値も一切問うことなく、自分の命で包み込み抱き抱えてしまう。決して自分が傷つくことを恐れない。すべてをそのまま浄化してしまう。この父の愛に触れた時、息子は造り変えられたのである。

息子に対する父の愛は、息子が生まれる以前から、そして生まれてから変わることなく注がれ、彼が父を捨てた時も、放蕩に明け暮れていた時も、一人虚勢をはり自己正当化の理屈をつけて帰って来た時も、父の愛は息子に降り注がれていた。だからこそ、息子が見出す前に、父が息子を見出し、息子が走りよる前に父が息子に向かって駆け寄った。そして、息子が父に手を出す前に父が息子を抱き抱えたのである。父はいいつも、息子の思いの如何に関わらず、無条件の愛で息子に願いを降り注ぐ。この父の愛が息子を造り変え、新しい人間を創造する命となったのである。

イエスさまは人々に道徳や倫理を説いたのではない。また人の在るべき姿の模範を示されたのではない。ましてや人の悪や罪を指摘し悔い改めを迫ったのではない。イエスさまは

人に何も求めなかった。

イエスさまがその生涯をかけて示された事は、あなたは神の愛によって創造され保持され完成される祝福のなかに生かされている者である、という事実だけである。そして、十字架はその愛の極致としての出来事であった。

どのような人であろうと、その人の成り立ちの根底には、この神の絶対的な愛が支えとして張っている。そして、その愛こそが、矛盾と不条理に喘ぐ罪深き我を清め、偉大なる虚構としての人間の愛を清め、限りある果敢なき者を永遠の命に与からしめ、不安と恐れとを平安に変えていく創造的な働きをするのである。

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに  
来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な  
者だから……そうすれば、あなたがたは安らぎを  
得られる。(マタイ福音書 十一章二八節)

このイエスさまのお言葉は今も天地に響き、輝き渡って、  
万のものに及んでいいる。

いつか時至って、この世の万物は崩れ、消え去るだろう。  
しかし、神の愛は、永遠に輝きつづけることだろう。

このクリスマス月の月に、イエスさまによって示された神の  
愛に生かされている恵みを、再び想起してその有り難さに合  
掌するものでありたい。



# べしるちるみ

神は与え神は取り給う。神の御名はほむべきかな

— 聖書 —

## 順序がある

松下昌義

なにごとにも順序というものがある。一があつて二があり、そして三があり四へと続く。

一を忘れて二から始めると何か落ち着かないし、ましてや、三や四を飛ばして、いきなり五に進んでしまつては、不安を感じる。

なにごとにも順序があり、その順序から外れると落ち着かず、不安を覚えて安心することができない。

音楽においても同じである。音楽とは音の流れである。一つの音は、その前の音を引き継ぎ、次に来る音を予想して成っている。そのような一音一音の流れで成り立っている音楽は、それなりのまとまりをもっていて、聞く者に安心と快さを与える。しかし、一音がその前と後との音に関係なく在るとき、その一音は異常な音となり、その音楽の流れはまとまりがなく、それを聞く者に不安を与え、不愉快にさせる。

それにしても、ものごとの順序というものは、厳密な意味で、誰か人が造つたものではない。順序というものは、人の思いや考えとは関係なくあつたことであり、あることであり、ありつづけることなのである。このところはとても大切な事実であつて、決して忘れてはならない。

人の成長にも順序がある。植物の成長にも順序がある。人は、それなりの順序をふんで子宮で成長し、この世に誕生して乳児から幼児、児童期を経て青年、壮年期に至つて老年期に向かう。決して、壮年期や老年期が突然来ることはない。また草木に於いても同じである。種が蒔かれ芽が出、そして葉が生まれ生長して花が咲き、実が成る。決して、順序をふまずして実だけになることはない。

これら順序は、決して私たちが造つたものではない。すべてに先立って、すでに在つた順序に言わば乗っけてもらつて、進まさせてもらったにしか過ぎないのである。だから、花が咲くことが有り難く、実がなることは感謝なのである。

科学はすでに与えられて在るその順序を、分析し構造を説明しても、その順序を造ることはできない。

人がそれぞれに今生きて在るといふことは、命

の営みの順序に従って生きていますのである。そして、その順序からはずれて生きることが出来ない。今、青年であるならば、それは、命の営みの順序にしたがって青年で在らしめられているのであり、今、あなたが壮年であるならば、命の営みの順序に従って壮年で在らしめられているのであって、それだけに、それは決して、自分の知恵や努力でそうなっているのではない。一日一日、その人生の順序に従って歩まされて来た結果が、今日の自分なのである。それゆえに、今生きて在ることは、生かされて来たという意味で、そのまま、有り難いことなのである。

×  
ものごとの順序とは、言わば、命の営みそのものだと見える。大宇宙の営みも命の営みである。その中の塵の一つのような存在である地球の営みも、命の営みである。さらに、その塵のような地球の上に住む私達も、同じ命の営みに支えられているものである。

×  
その意味では、私たちは決して、自分自身で生きていてのではない。生かされている者なのである。

×  
生かされている者であるということは、自分の命の営みを自分自身から始めないということである。私たちの命の営みの初めは、私たちではない。私たちが生きていくという事実、順序で言えば二なのである。私たちの命の営みはまったくと私たちの側には属してはいない。私たちに先立って命の営

×  
みが宇宙的な規模で躍動し、それが順序正しく及んで私たちの現在の命の営みを支えているのである。それが、生かされているということである。私の努力や配慮や知恵などとは関係のない、命の営みがある。それが一なのである。

×  
私たちが一ではないことを、はっきりと知らしめられることが人生のさまざまな時に起こる。例えば、突然の事故、思わざる人との出会い、襲い来る病やさまざまな不幸、そして死。これらのひとつひとつに人は、ただ狼狽するばかりで、それをただ自分に受ける他ないことを知る。そこでは、悲しみ喜び、恨むだけで一切の為す術を失う。人はそのとき、自分の命の営みは、自分ではどうすることも出来ないことを思い知らされる。

このことは、人間の歴史の流れに於いても例外ではない。大宇宙の命の営みは、目に見えないミクロの世界から、想像も出来ないマクロの世界まで抱き抱えている。

一つの国が起り終焉を迎えることも、また、一つの文化が起り衰退していくことも、更に、一つの山が生まれ崩れ去っていくことも、すべて、大宇宙の命の営みの姿なのである。誰もそれを止めることは出来ない。

大宇宙のなかで起こるすべてのことの、根拠はそこにはない。勿論、地球上でおこるいかなる事も、そこに根拠はない。ましてや、人間の世界に起こる一切の現象の根拠は人間自身にはない。科学も文化も芸術も宗教も、はたまた戦争も飢餓



も人間に根拠はない。すべては、大宇宙の命の営みの中でおこることなのである。

×

人間に根拠はないということ、人間に責任がないということとは同じではない。人間には人間としての責任はある。しかし、その責任の根拠も人間にはない。

×

人が、自分の責任を自分ではたせると思うところに、人間の傲慢と悲惨さがある。人間は自分自身に対して順序として一ではないのだ。例えば、戦争も二なのである。人が戦争を人の思いでどうにでもできると思うところに、戦争に対する人間の傲慢さがあり、愚かさがある。

戦争をした時のことを思い出すとよい。当事者同志がともに戦い、遂にどちらか一方が敗れて、何時も戦争は終わる。それは、終わらせられたのであって、決して、人が終わらしたのではない。

それは、食いつくした結果、食うものが無くなったので食わなくなったというのと同じである。

×

×

私たちがものごとの順序に於いて二であるとは、すべての事柄が、大いなる命の営みのなかで許されてあるということである。例えば、大いなる命の営みは、戦争を奨励はしない。しかし、人がその欲に於いて戦争を行う時、その悲惨さのみをもたらずその出来事のゆえに、その時こそ命の営みの根源である神の声をきくことができるのである。つまり、人間が

決して一ではなく二という存在なのだということを知る好機にいたのである。それが人間という者の責任なのである。なぜならば、人間はそのような者として創造されて在る者だからだ。

×

×

にもかかわらず、戦争という出来事のすべてを、自分の手の内で自由に出来ると思い込むならば、つまり自分が一だと思いついでいるならば、その戦争はただ、徹底して破壊と悲惨さだけで終わり、さらなる戦争を生むことになり、遂に、自己滅亡を来らせる。これは、大いなる命の営みの絶対法則なのである。それは、人は決して一ではなく二なる存在であることを、一自身が明らかにすることである。

このことは、ただ戦争というできごとだけに於いてではなく、私達の生活の身のまわりで起こるさまざま出来事においても同じことである。

×

×

その昔、コリントという町にある教会の指導者のことで、「わたしはパウロ先生につく」「わたしはアポロ先生につく」というような争いが信徒の内でも起こった。その時、使徒パウロは次のように手紙を書き送った。

「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。あなたがたを、信仰に導いた人にすぎない。神から与えられた分に応じて仕えているのである。わたしは植え、アポロ

は水を注いだ。しかし、成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは、成長させて下さる神のみである。」

— コリントの信徒への手紙一 三章五節 —

使徒パウロがここで示していることは、アポロ先生も私も一ではなく二なのだから、一である神に目を向けよということである。

神がすべての根拠として、すべてを支え保ち育て完成させる命そのものであることに、全身全霊をもって目覚めよ。と叫んでいるのである。

私達の存在にかかわる一切のこと、吐く息も吸う息も、立つことも座ることも、走ることも歩くことも……、そして宗教も科学も芸術も哲学も、政治も経済も……すべてが、川と船の譬えというならば、船なのである。船は川に浮かんでこそ船なのである。船はそれ自身では船ではない。川が船を船にするのである。川が船に関わりつつける限り、船は船でありつつけることができる。しかし、陸にある船はいまだ船ではない。この関係は、川が一であり船は二である。

この世のすべては、神の懷に抱かれてこそ在ることができ、それゆえに、神に対立するものはなにもない。否、どのようなものも神に対立など出来ないのである。大いなる命の営みから出るとき、人の命が消えて、もはや人として在り得

なく、なるように、この世のすべては、大いなる命の営み、即ち神から、一から離れるとき、何もなくなる。

私達は、正義が正義だけで立つと思ひ込んでゐる。愛が愛だけで立つと思ひ込んでいる。美がそれ自身で美でありうると思ひ込んでいる。善は善自身で善で在り得ると信じてゐる。だから人は声高に、正義を、愛を、善を、平和を叫ぶ。しかし、それは虚しく終わる。そして、時として偽善と独善となり、あげくの果ては、対立を生み、互いに正義を主張し、愛を互いにふりかざして、果てし無き、醜き争いとなることがある。それは、そこに一が抜け落ちてゐるからだ。大いなる命の営みとしての神そのものを、おのれの足下に見る目が失われており、自らを一とするからである。

この世の矛盾、不条理の直中に我が身を置いて苦惱したヨブという一人の男が、人と戦い、神と争った末に、次のように神に告白した。

「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。……わたしは理解できず、わたしの知識を越えた驚くべき御業をあげつらっております。しかし今……悔い改めます。」

— 旧約聖書 ヨブ記四二章 —



# べしるちるみ

あなたがたは、惑わされてはならない。

— キリスト —

惑わされてはならない

松下昌義

伝統的な仏教や神道やキリスト教に対して、それらを根拠として、第二次大戦後わたしたちの身のまわりに起こって来た宗教のことを「新興宗教」と言ったが、その後一九七〇年代になると、これら新興宗教の教勢が停滞しはじめ、組織の防衛または現状維持の状態になり出した頃、現れて来たのが「新々宗教」と呼ばれる一連の宗教である。その代表的なものがマスコミに話題を提供して知られるようになった「オーム真理教」であり「幸福の科学」と呼ばれる宗教集団である。

これらの新宗教や新々宗教については、いろいろな立場の方々が解説評論をしておられるので、わたくしが今さら語るまでもないことだが、あえてそれらの特徴の一つを言うなら、新宗教が日本の経済の成長とともに拡大発展して行き、その時代の価値観であった物質的な豊かさへの志向性、それは病や貧乏や災いからの救済願望であり、成功や出世への上昇願望といった極めて現実的で生

活感あふるるものであり、したがって、その信者は中年の主婦層を中心にした人が多かったといえる。それに対して、新々宗教の場合は、超能力とか霊能力、チャネリングなどといった所謂神秘的なもの、非合理的で原始的なものがその内容にあるといえる。

これらの現象は、極度な合理主義、物質主義に對する不安と反発とがそこにあることは確かなので、特に若者たちがこのことを敏感に感じており、したがって、新々宗教に若者たちが魅かれて行くという現象が起こるのだろう。ただ、そこには現実社会に背を向け、非現実的な共同体を志向する傾向もあり、新宗教の場合のように、中年主婦層の生活感あふるる現実的なそれとは対象的だと言える。

新々宗教のこのような動きは、世界の先進諸国においてもその形は違っても、共通した内容があり、おおくの人々の関心をあつめているということである。例えば、アメリカにおいて展開されているニューエイジ運動などはその一つであると思われる。わたしには詳しいことはわからないが、紹介されている書物などによると、普通の意識の状態から異なる意識の状態に自分を変えることに

よって、異次元の高い神的な存在にふれ、自我の内なる批判的な知性を抑え、自分を本当に解放し実現させようとすることを願いとしているそうである。このような体験を通して、肉体は癒しを得、人々や自然との調和をもたらし、どうにもならなくなった近代の合理主義、物質文明を乗り越え、科学与靈性との統合をはかり、健全な未来の文明をもたらそうとしているというのである。

このように考えて来る時、今日の新々宗教やアメリカのニューエイジ運動などは、時代が求めるものであり、同時に新しい文化の創造の始まりのようにも思える一面がある。その意味では、決して愚かなこととして一笑に流してしまうことはしてはならないと思う。

ここで、少し堅い文章になり「みちしるべ」には相応しくないが、あえて、湯浅泰雄氏が語るところを紹介させていた。……オカルティズムはいつの時代にも、時代の知的パラダイムを変換して行くための原動力になる。そしてそれが合理的知性おも満足させる形にまで発達し、そこで生き残った部分が次の知的パラダイムを造ってゆく。しかし心靈主義信念が科学あるいは学問によって証明されることはおそらくないであろうとおもわれる。……(たましいをどうかんがえるか―科学とオカルティズム―)

はじめから少し理屈ばくなくなってしまったが、ここで私達の

身のまわりにある新々宗教に目をもう一度向けて見よう。

正直言って、私達が見聞きするそれらの宗教のすべてが、先に述べたような深い思想性を持っており、ましてやそれに属する信者がその思想性を自覚しているとは限らない。むしろ、信者はいつもの即物的であり感覚的である。つまり、異次元の世界を見たとか、聞いたとか、感じたとか、不思議なことが起こったとか、未知のことが的中したとか、とにかく低次元の靈能力に対する好奇心による欲心が働いている場合が多いように思われてならない。

それが証拠に、靈能力を持っているだけで偉い者のように思ったり、見たとか的中したとか、病気を癒したとかいうことで、その人を神様のように尊敬したりする。ときとして当の靈能力者も、自分が偉くなったように思いこむ。しかし、自分の身体を地上から何センチ浮き上がらせたとか、水の中に何分潜っていることが出来たとかいうことと、その人間が偉いということと何の関係があるのだろうか。また、それが出来るということと人間が人間らしく生きるということと何のかかわりがあるのだろうか。

人は神や仏にさまざまな願いをかけ求める。健康であるように。不幸や悲しみや失敗がなく、すべてのことが幸運にはかどるようにと。弱い私達はそのように神仏に願うが、それ自体決して悪いことでも愚かなことでもない。生きている限りそれは当然の願いであり求めであろう。しかし、それだけ

が目的となり、それだけが自分の生きるすべてとなるとき、  
ち、その人は、自分にとって大切なことを見失うことになる。  
では、見失ってはならない大切なこととはなにか。

X

あるときイエスさまが不思議な業で五千人の人々に食物を  
お与えになった。イエスの奇跡である。その結果それを伝え  
聞いた人々も加わり、大群衆がイエスの後を追った。その目  
的は食物を無償で貰うためである。ときに、イエスより先ん  
じて、行かれる処に人々が集まり、いまや遅しとイエスさま  
の来られるのを待っていた。その群衆の姿を見たイエスは彼  
らに言われた。

はつきり言っておく。あなたがたがわたしを捜して

いるのは、しるしを見たからではなく、パンを食べ  
満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、い  
つまでもなくならないで、永遠の命に至るたべもの  
のために働きなさい。これこそ、わたしがあなたが  
たに与える食べものである。

—ヨハネ福音書六章二六節—

X

X

イエスは自分が行った業は「しるし」だと言われる。イエ  
スが言われる「しるし」とは、現れた象徴である、それは現  
れない人間の根源的な支え、また根拠そのものの働きの象徴  
なのである。

現れたそれは、どれほどに驚くべきことであつたとしても  
それは消えて行くものである。いうならば、決して、それは  
私達の拠りどころとはならないし、してはならない。生きる  
拠りどころになると思うのは、自分の思い込みであり、幻想  
である。

それらが物であるから拠りどころや支えとならないとい  
うことではない。物はずまらないもの、心は価値あるものだ  
どと言っているのではない。それがたとえどのようなもので  
あつても、人がその思いや感じや意志などにより生み出した  
もの、したがって、歴史の内部に出てくる一切のもの、また  
関係そのものは、決して私達が本当に生きる根拠にも支えに  
もならない、ということなのである。

X

X

ある人たちが、エルサレムの巨大な神殿の見事に驚嘆し  
ている様子を見て、イエスは弟子たちに言われた。

「あなたがたはこれらのものに見惚れているのか、一つの  
石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る」(ル  
カ福音書二一・五)

その神殿の巨大さや見事さがそのまま、その宗教の正さ  
の拠りどころや真理性を支える保証とはならないことを、イ  
エスは言われたのである。このような感覚は大切であり、極  
めて健康的な感覚である。

大方の人は、「建物が立派だから」「あのような偉い方が  
行っているから」「あんなに沢山の人が認めているから」

それは正しいこと、善いことだと思ふ。このことは宗教の場合でも同じことである。だから、すぐに大きな建物、それら他にはないような建物を、宗教教団は競って建てようとする。そして信徒数百万人とその数を誇張して誇り、有名な看板に飾り立てるのだ。信者たちはそれらを見聞きして、自分の宗教や信仰に安心する。だが、そのような事柄に自分の存在の拠りどころを求め安心しようとしても、決して本当の安心は得られない。

× × ×  
さきのイエスの答えに対して弟子たちは「先生、では、そのことはいつおこるのですか。また、そのことが起るとときには、どんな徴があるのですか」とたずねた。

「いつの世にも人々が関心を持つことは同じである。『いつそのようなことが起るのか』」そのことがどのようにして起るのか」と、未知なることについて知りたいたいと思う。それは、それを知ることによって自分の存在に安心を得たいのである。

「〇〇年に世の終わりが来る」××が起ると世の終わりが近づいた前兆である」などと言われるが、それらのことをどれほど多く知っていたとて、決して人間の最後の拠りどころにはならない。だから、イエスは「誰にも惑わされてはならない」と言われる。そんなところに、あなたの本当の拠りどころはないのだ、と言われる。

すべてが、そこから出てそこへ還って行く命の滾りの世界がある。それこそが本当の拠りどころであり、命のまことの支えである。イエスはそれを「神の国」と言われた。神の国とは、神の命が恵み滾るそれである。万物はこの命に依らずして瞬時も在ることなく、この命の支えなくして寸分たりとも動くことはない。

× × ×  
人がこの命に開眼させられるとき、万物は相対化される。政治も哲学も文学も道德も、経済も技術も芸術も、更にもような宗教も信仰も、そこでは相対化される。それ自身確かなものは何も無くなる。

× × ×  
だが、本当の拠りどころ、真の支え、万物の根源に滾る命を知らぬ者は、やたらこの世の権力、武力、知力、金力、道徳、宗教や信仰などを振り翳し、偉大なものを得たかのように錯覚する。

× × ×  
先のイエスの弟子たちは未だその命に開眼していない。だから、神殿の巨大さに魅れ驚き、これらは崩れ去るとイエスさまが言えば、「それは何時」「どのようにして」などという事柄に、自分のすべての注意を向ける。

「惑わされてはならない」とイエスはいわれる。私達が生きていく命の一番奥にある本当の拠りどころ、真の支えに先ず目を向け、そこに立とうとしないかぎり、私達は決して救われることはないだろう。



## あとがき

自分の考えや思いを、できるだけ語らないですめばよいと願っています。ましてや、自分の考えをおしつけるようなことはしたくないと願っています。

人の思いを越えて、すでに有り、また有りつづけ、どのような人も、自分の最も素直になった思いのところ、**「そのとおりです」**と頭を下げる事が出来る**「そのこと」**を、共に分かちあいたいと願っています。

イエスさまの言葉と行いとに耳を傾けていますと、**「そのとおりです」**と万人が、また万物が素直にうなずける**「それ」**を、示しておいになることが分かって来ます。**「それ」**をイエスさまは**「天の父なる神さまの御意志」**と申されたのです。

わたしは、自分の考えや思いではなく、**「天の父なるかみさまの御意志」**を多くの方々と一緒に、分かちあいたいと願っています。

この**「みちしるべ文庫」**八号もそのような願いで記したものです。山本哲也氏が手作りで一冊に纏めて下さいました。感謝いたします。

一九九四年三月十日

みちしるべ文庫 八

「聞こえて来る声に生きる」

一九九九年六月二十日 第二刷発行

著者 松 下 昌 義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九  
電話(〇七五)七八一―九六四〇